

「いつもと違う」感覚で行為する看護実践に埋め込まれた知

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-07-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大谷, 則子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.20780/00023796

東京女子医科大学大学院 看護学研究科

博士後期課程学位論文要旨

「いつもと違う」感覚で行為する看護実践に埋め込まれた知

東京女子医科大学大学院

看護学研究科看護学専攻

大谷 則子

I. はじめに

看護を取り巻く医療制度の変化や入院期間の短縮化、日進月歩の医療技術の発達の中で、科学的な知識や技術に基づいた援助の重要性が叫ばれることは必然である。看護においても、Evidence-Based Nursing(EBN)の重要性が問われ、科学的に立証されたケアを提供することが求められている。しかし、看護師は日常的な患者との関わりの中でEBNのような科学的に立証された考え方に基づいて患者の状態を把握することもあれば、言語化されないながらも患者との相互作用の中で感覚的なものの見方から「いつもと違う」何かを感じとることで患者のことを理解し、詳細に判断する前に行為することもある。これまでに、このような科学的とは言い難い不確かな「いつもと違う」感覚で行為する看護実践を詳らかに記述されることはなかった。

本研究の目的は、「いつもと違う」感覚で行為する看護実践に埋め込まれた知を記述的に明らかにすることである。なお、本研究では『「いつもと違う」感覚』とは、「患者と関わる看護師の行為に内在し、看護師の行為を決定づけている感覚のこと」、「行為」とは「認識にのぼらない意図や判断を含む何らかの内的過程を経るもの」、「知」とは「理論的知識を土台にしつつ経験を積み重ね、さらに書物や他者の持つ知識をその経験と融合させながら自己の内面に取り入れ、

その時その場の状況に応じた適切な形として具現化されているもの」とした。

II. 方法

本研究のデザインは、フィールドリサーチを用いた質的記述的研究デザインである。研究参加者は、急性期病院の外科病棟に勤務し、本研究への参加の同意を得られた6名の看護師である。「いつもと違う」感覚で行為する看護実践を記述するために二つの工夫をした。一つはデータ収集の方法で、研究参加者が「いつもと違う」感覚で行為している場面を研究者自身の感覚で感じ取って抽出するために、研究者が研究参加者に同行し看護実践の場に身をおいて参加観察を行った。さらに、どのような感覚や状況に裏打ちされたものなのか業務に支障のない範囲での聴き取りも併用した。もう一つは記述の方法で、西田幾多郎の「純粹経験」と「行為的直観」という概念を援用して結果を記述した。記述の際には、各研究参加者が看護する上で善とするものを含む背景と、その看護実践の状況における「純粹経験とその破壊」「行為的直観を伴う行為」に着目し、記述された行為からその看護実践の状況における知が具現化され、複数の看護実践の状況で具現化された知と研究参加者の背景とから、その研究参加者固有の「いつもと違う」感覚で行為する看護実践に埋め込まれた知を言語化することを試みた。

III. 結果

研究参加者は臨床経験3年目から16年目の看護師6名である。「いつもと違う」感覚で行為する看護実践に埋め込まれた知は各研究参加者固有のものであり、それは、その研究参加者自身の背景と、複数の看護実践の状況において具現化された知から立ち現われ、記述された。

A看護師は臨床経験13年目の看護師で、患者に優しいことを善としていた。

A看護師の「いつもと違う」感覚で行為する看護実践に埋め込まれた知は、【患

者と情緒的なつながりを持つ中で患者の苦痛を自らの知覚を用いてとらえ、常に患者を気づかいながら患者が安楽になる方法を見出す】であった。B看護師は臨床経験14年目の看護師で、常に理由を探ることを善としていた。B看護師の「いつもと違う」感覚で行為する看護実践に埋め込まれた知は、【常に行動しながら知覚を用いてわずかな差異を瞬時にとらえ、原因を追究し、積極的に治療に介入することで、患者の回復を促進する】であった。C看護師は臨床経験15年目のWOC看護師で、認定看護師としての専門性を用いて回復を促進することを善としていた。C看護師の「いつもと違う」感覚で行為する看護実践に埋め込まれた知は【自身の高い専門性をもとに知覚したわずかな差異を瞬時にとらえ、原因を追究し、積極的に治療に介入することで、患者の回復を促進する】であった。D看護師は臨床経験16年目の看護師で、患者の細かい変化に気づくことを善としていた。D看護師の「いつもと違う」感覚で行為する看護実践に埋め込まれた知は【常に目の前の患者のことを考え、いつもとは異なる部分を間違いさがしのように丁寧に観察して異常を知覚でとらえると同時に異常の原因を追究し、患者のあるべき姿に戻そうとする】であった。E看護師は臨床経験13年目の看護師で、こまめに観察し自分で判断することを善としていた。E看護師の「いつもと違う」感覚で行為する看護実践に埋め込まれた知は【患者をこまめに観察しつつ、患者の身体的な変化や不安の要因を丁寧に導き出して一つ一つに対応することで、患者の安心と信頼を確保し、意欲へとつなげる】であった。F看護師は臨床経験3年目の看護師で、患者の小さな変化に気づくことを善としていた。F看護師の「いつもと違う」感覚で行為する看護実践に埋め込まれた知は【自分なりのやり方で観察したり、患者と情緒的にかかわったりすることによって、いつもの術後の患者の姿と異なることや患者の苦痛に気づき、常に患者を気遣いながら自分に可能な方法で急いで解決し

ていつもの姿に戻そうとする】であった。

IV. 考察

研究参加者 6 名の「いつもと違う」感覚で行為する看護実践に埋め込まれた知を比較検討し、①常に目の前の患者のことを考え、情緒的なつながりをもって患者を気づかう、②知覚を用いてとらえる、③原因や理由を探り、追究する、という 3 つの共通する特徴が含まれることが示唆された。①では、その患者と看護師との情緒的なつながりが前提となって患者を気づかい、状況の内に身をおくことで「いつもと違う」感覚で行為する看護実践が成立していることが示唆された。②では、「いつもと違う」感覚で行為する看護実践に埋め込まれた知は知覚を通してとらえられ、自らの身体で意味を持ち、瞬時に行為を通して身体を用いて表現されて浮き彫りとなることが示唆された。③では、「いつも」は純粹経験として内部知覚に統合されるが、「いつもと違う」感覚は純粹経験の破壊となり、それと同時に行為的直観を伴う行為があり、この行為が可視化される。直観的であっても意図を含む行為には知が用いられており、それによって看護師は遡及的に行為の理由を説明できることが示唆された。

また、本研究によって見出された知の臨床判断モデルへの応用について考察した。従来の看護過程による思考過程にとどまらず、その時その場で感覚することや気づくことから考える臨床判断の教育方法を模索していくことが示唆された。

さらに、本研究の過程において、言語化することの困難な事象を看護師自らが言語化し可視化することが知の共有につながることを示唆された。知を共有する機会を持ち、看護実践に活用できる環境を意識的につくることが看護管理者の重要な役割であり、こうした環境が提供されることで、看護師全体の能力や看護の質の向上につながることを示唆された。